

鹿児島の昆虫⑩

幼虫で冬を越すゴマダラチョウ

昆虫担当 中峯浩司

ゴマダラチョウはタテハチョウ科の中型種で、黒と白のまだら模様の羽が特徴です。年に3回ほど成虫が発生し、秋にふ化した幼虫は、しばらくエノキの葉を食べて成長した後、幼虫のまま冬を越します。

越冬場所は落ち葉の下。幼虫はエノキが落葉する頃に食べるのをやめ、木の幹をはって地面に降ります。そして、木の根元にたまった、ちょうどいい湿り気具合をした落ち葉に、口から出した糸で台座をつくって、しっかりとくっつきます。

この越冬幼虫を探し出すのは簡単です。木の根元付近の落ち葉を1枚1枚ひっくり返していけばいいのです。鹿児島では珍しいオオムラサキの幼虫も、北薩などの生息地では同じ方法で探すと見つかることがあります。

ところが、ゴマダラチョウの幼虫の中には、木を降りずに樹上で越冬するものも知られています。私が本種の樹上越冬に気づいたのは

2002年の冬、開聞岳山麓で落葉下の幼虫を探していた時でした。樹上における越冬場所としては、小枝の分かれ目や幹にできたこぶなど、寄り添うものがあるところが選ばれます。また、この後の観察では、越冬中でもしばしば居場所を変えることなどが分かりました。

落ち葉の下で冬を越した幼虫も、エノキが新芽を吹く前に再び木に登り、新芽が吹くのを待ちます。そして、新葉を食べて成長した幼虫はやがて蛹になり、5月頃成虫となって飛び出すのです。



落葉下の越冬幼虫



越冬幼虫の顔

鹿児島の植物⑪

溪流植物 カワゴケソウ科

植物担当 寺田仁志

溪流は、ひとたび豪雨があると様相は一変します。平水時より遙か高くまでかさを増して怒濤のように流れ、逃げるできない植物たちはただ耐えるだけです。体のつくりを変えることで水の抵抗を減じ、岩上にへばりついて、溪流での生活に適応した植物は溪流植物と呼ばれています。

カワゴケソウ科植物は熱帯性の溪流植物ですが、フィリピン、台湾、沖縄に分布せず、日本ではカワゴケソウ属4種（最近の研究によればカワゴケソウ科は2種にまとめられるようです。）とカワゴロモ属3種があり、1種をのぞき鹿児島県だけに分布しています。

カワゴケソウ科の最大の特徴は葉緑体があるのが葉ではなく根にあることです。根は平たくなってぴったりと石にしがみついただけでなくデンプンを合成しているのです。一方葉は色素を失い針状になって特定の期間だけ現れる奇妙な形態です。

花は11月から1月にかけての水量の少な

い期間に咲き、水中から抜け出したものが比較的実を結びます。

2つめの大きな特徴は水深が浅く流速の速いところにしか生えないことです。水の流れが弱かったり、止まっているところでは、生えていないのです。

カワゴケソウ科植物の生活は特異であり昭和29年に県の天然記念物に指定されました。このカワゴケソウ科の植物に今危機が訪れています。水質が富栄養化して、藻類が生え被さって光合成がうまくできず枯死する個体も出てきており、環境の改善が望まれます。



ウスカワゴロモ